

那珂市議会原子力安全対策常任委員会記録

開催日時 令和7年9月17日（水）午前10時

開催場所 那珂市全員協議会室

出席委員 委員長 小宅 清史 副委員長 花島 進
委員 原田 悠嗣 委員 渡邊 勝巳
委員 萩谷 俊行 委員 笹島 猛

欠席委員 なし

職務のため出席した者の職氏名

議長 木野 広宣 事務局長 会沢 義範
次長 萩野谷智通 次長補佐 岡本奈織美

会議に付した事件

（1） 観察研修の振り返りについて

…観察内容について各委員から意見あり

（2） その他

議事の経過（出席者の発言内容は以下のとおり）

開会（午前10時00分）

委員長 おはようございます。

議会も終盤に入ってまいりまして、今日は原子力安全対策常任委員会を開催させていただきます。

それでは、開会前にご連絡いたします。

会議は公開しており、傍聴可能といたします。また、会議の映像を庁舎内のテレビに放送しております。会議内の発言は必ずマイクを通していただき、質疑、答弁の際は簡潔かつ明瞭にお願いいたします。携帯電話をお持ちの方は電源をお切りいただくか、マナーモードにするなどご配慮のほうをお願いいたします。

ただいまの出席委員は6名であります。欠席委員はおりません。定足数に達しておりますので、これより原子力安全対策常任委員会を開会いたします。

職務のため、議長及び議会事務局職員が出席しております。

ここで議長よりご挨拶をお願いいたします。

議長 改めまして、おはようございます。

今日は常任委員会最終日でございます。また、明日、原子力安全対策常任委員会は観察があるということですので、お気をつけて行っていただきたいと思いますので、よろしくお願ひいたします。私ども別の公務があるものですから、あした一緒に同行できませんので。

また、今日は会議案件がその他も含めて2件でありますので、慎重な審議をお願い申し

上げ、挨拶とさせていただきます。どうぞよろしくお願ひいたします。

委員長 ありがとうございます。

それでは、本委員会の会議事件のほうを確認してまいります。

サイトブックに掲載されている会議次第のとおりとなります。

これより議事に入ります。

会議事件1番項、視察研修の振り返りについてを議題といたします。

7月29日、30日に宮城県石巻市役所、そして女川原子力発電所の視察研修を実施いたしました。そちらの振り返りを行いたいと思います。

たまたまカムチャツカ地震の津波の騒ぎのときにぶつかってしまったんですが、いろいろ本当に絶余曲折ありましたが、委員の皆様のご感想やご意見などありましたら、よろしくお願ひいたします。

笹島委員 私は員になりたい。去年は小浜市、今年は女川町に行きましたけれども、どちらも共通するところは、市街地から随分離れていましたね、何キロと。僻地のところにつくっていました。本来、原子力の立地は、あああるべきだと思うんですよね。ちょっと振り返ってみて、ここの日本原電のあれはどうかというと、30万人、50万人というところに密集している住宅街、本当に振り返ってみれば危険極まりないなということを改めて思いました。

それで、今回の東海村村長選で山田村長が再選されましたけれども、以前は中立的な立場を取っていたと思うんですけども、今度は賛成のほうにあれした。じゃ、那珂市はどういう立場を取っているのかと。東海村といえば交付税がなくてもやっていける村、それから交付金は、莫大な交付金をもらっていると。豊かなあれで、住みよいまちでも、茨城県でトップクラスなんですね。その隣同士の那珂市というのは何の恩恵も受けていない。そういうところに、今言った日本原電、原発がこれから再稼働されようとしているところ。何か那珂市として言うことはないんだろうけれども、何か損しているなという感じに思える。

話は飛躍しちゃったかもしれませんけれども、ふと、何よりも日本原電の原発が人口密集地で再稼働する必要はないんじゃないかなということを改めてちょっと思ったんですけども、市民はどう思っているのかなという。そういうことをちょっと感想ですね。飛躍し過ぎた感想です。失礼いたします。

委員長 女川原発を見て、東海第二は動かさないほうがいいと思ったという、そういう結論でよろしいですか。

笹島委員 ちょっとまとまっていなかったんですけども、まとめますと、原子力再稼働というのは反対じゃないんですよね。ただ、立地に問題があるということの1点だけです。何よりもによって、この密集地のところで再稼働する必要は、いかがなもんかなという結論です。

委員長 那珂市には恩恵がないと、そういうことをおっしゃっているわけですね。分かりました。

ほかございますか。

副委員長 幾つもあるんですが、まず、石巻市は、最初にいろいろ説明してくれた方は何なんですかと聞きたくなるような、規制がといつても今の規制は本当の規制じゃないから、いた立場で何かそれを引きずって話している感じがして、余計な無駄なことをたくさんしゃべっていて、肝心なことはあまりしゃべっていなかったという、ちょっとがっかりでした。むしろ最初の説明のときに来てくれなかつた課長はいろいろ話してくれたし、そのほうがよかったです。

実は私、質問をなげたときに、この質問はと言われた項目があつて、答えられなくてもいいから、答えられないんだったら答えられないと言ってくれと言つたんだけれども、それも聞かないでくれと言われていたんですよ。だけれども実際に行つたらそんなことはなくて、何なんだろうなと思つて、だから、こちらの対応をした一部の方が、変な思惑でそんなことは聞かないでくれと言つちやつたのかなと思いました。

それから、緊急時の設備はいろいろあって、随分いろいろ立派な施設があるなと思いました。那珂市とえらい違う。

それから女川原発なんですけれども、原発には直接関係ないけれども、最初びっくりしたのは、すごく景色のいいところだね、周辺が。それは余計な話なんですが。

残念なことに、さっきも話があつたように、津波の警戒状態になつちゃつたので、こちらに説明してくれる方が技術者じゃないと思うね。だから、僕は幾つか質問を用意していたんだけれども、もちろん投げかけたのはあるんだけれども、あまり細かいことは書かなかつたんですよ。だけれども、その現場に分かっている人が来れば、いろいろディスカッションする中でいろいろ聞けると思ったんだけれども、全然そういうことに対応できない人が來た感じ。しかも、津波の対応があるから、向こうもそういう人を呼べない感じでした。前に六ヶ所村に行ったときに私が質問したら、説明する人がちょっと分からぬことがあつたので、分かる人に聞いてくれたんです。そういう幅のある対応をしてくれたんだけれども、今回、私としてはちょっと失敗だったと思います。もっと聞きたいこと全部、事細かに投げかけておけば、向こうも答えやすかったかなと思いました。

周辺環境としては、たしかに女川原発の直接の周辺は田舎ですけれども、ちょっと山越えて、半島越えると、もう石巻市なんだよね。だから、確かに東海村ほど九十何万人ということはないんだけれども、石巻市としては、かなり深刻な位置にいるなと思いました。結構近いということです、原発はまるっきり見えないんですけども。

委員長 合併したときに女川町だけ合併しなかつたので、周りは石巻市なんですね。だから石巻市まではすごい近いですね。ただ、繁華街まではちょっと距離はありますけれども、それでも P A Z に入りますもんね。そういう意味ではなかなか、しかも防災の設備も見

ましたけれども、やはりこちらと違って、向こうは現実的に津波で死者もたくさん出ているので、防災に対する意識が、やはりすごく強いなというのは、防災センターを見て思いましたね。

副委員長が、それは聞かないでくれと言われたというのは、そういう具合の悪い話だったんですか。

副委員長 そんな具合の悪い話じゃなくて、要するに、どのくらいのリスクだと考えているかということですよ。例えば500年に1回大きな事故が起こるだろうとか、それともう一つ、市民がどういうふうに捉えているか、その辺りが分かれば教えてくれといった話かな。

だから、何年に一度というのを別にはかって事故を起こすわけじゃないから、別に厳密な数字じゃないんだけども、ただ備えるために1万年に1回なのか1,000年に1回なのか100年に1回なのかでやったら、数学的にいうと期待値という言い方をするんだけども、期待しているわけじゃないですよ。そういうリスク管理の上では大事なことかと思うんですけども、どこもそれには触れないんですよね。だけれども石巻市はどうかなと思って。

実は余計なことかもしれないんですが、女川原発というのは、多分東海第二よりも、ある意味では技術的にしっかりやっていたところなんですよ。一つの例が敷地を下げなかった。敷地を掘り下げれば、冷却水のくみ上げが楽になるんですけども、それはリスクがあると、ある人が抵抗したらしいんだよね。それで、ちゃんとやっていたというのが東海原発と大分違うところですね。

東海原発の地盤は砂地が多くて、固いところが大分深いから難しいというのはあるんですけどもね。

委員長 ほかございますか。

原田委員 今回、やっぱり同じような感じなんすけれども、石巻市役所もそうですけれども、防災に対する意識というのは、建物とかを見てもすごいあるなというふうに感じました。やっぱり原発に行ったときに、ちょうど津波の警報が来たというときに、ここにいれば安全ですよというふうに言われて、それがやはり東海原発とは大きな違いなのかなというふうにも感じました。

もしも津波が来たとなつたときに、同じ状況で東海原発にいたら、どういうふうな対応になつたのかなと、避難というふうになつたのかなとか、その辺ちょっと分からぬところですけれども、そういう面では、やはり周りの人口も90万人いるというところとかも、やっぱり状況はかなり違うかなというふうには感じました。

また、今回そういうふうに津波警報とか、原発の近くにいるときに実際に経験することができたというのは、もし茨城県沖で地震が起きたとかとなつたとき、どういうふうになるんだろうというイメージとか、イメージというか実感というか、そういうものを感じることができたのは、ある意味よかったかなというふうに思いました。

以上です。

委員長 ありがとうございます。

昨年行った大飯原発もそうですけれども、半島だと確かに被害は最小限ですけれども、今回閉じ込められて思ったのは、脱出するのが本当に大変だと、逃げられないんだなというのを感じました。

渡邊委員 私の感想なんですけれども、やっぱりさっきの原田委員と同じように、実際に避難者になったというのは貴重な体験だったのかなと思います。先ほども委員長おっしゃいましたように、大飯原発は半島にあって、結局避難路が、通れなくなつたから避難できなくなつて、そこから脱出に時間がかかってしまった、脱出に時間がかかったという言い方は変ですけれども、脱出できなかつたというのが一番のネックだったのかな。ただ、それは半島がゆえに普通の人方、住んでいる方はもっと少ないので避難の仕方はまたいろいろあったんじゃないかなとは思うんですけれども、これが東海原発に置き換えたときというのやはり、東海原発の場合だと半島ではないので、避難は、もう内陸に逃げるしかない。その辺は、避難の仕方というのはまた変わるとは思うんですけれども、避難所にずっととどめられているという苦痛と、あとは現場の方々の対応の大変さ。今まで私は対応する側というか、避難を受け入れる側だったんですけども、今度避難する側として見たときというのは、やはりその現場の方々というのは大変なんだなというのが一つあったということと、あとは、避難している我々は、結構わがままなんだなというのを、これを感じました。やっぱり、前にちょっと防災の講義を受けたときに、避難する側はお客様じゃないんだよと、ホテルじゃないんだ、ここはというふうに強調された講師の方がいたんですけども、それをやっぱり感じました。お客様になつちゃいけないと、一緒になって何か考えるべきだろうし、行動するのも向こうの指示に従わなければ、まずいよねというところを痛感しました。となると、そういうところを避難する側も意識づけさせるというの大事なのかなというふうに感じました。

ちょっと原発に関する視察とは違うような視点になったのが、かえっていい体験をさせていただいたと思いました。

以上です。

委員長 ありがとうございます。確かになかなかできない体験を女川原発という場所でしたというのは、これは本当に貴重な経験ではあったと思います。

萩谷委員、何かございますか。

萩谷委員 ほとんど皆さんお話ししたとおりだと思うんですが、一つ今委員長からあった大飯原発、あれも半島ですよね。あそこはヘリコプターで逃げられる人を運ぶ訓練をしているとか、やっぱり女川原発なんかもそういうことが必要なのかなという感じはしました。逃げ道がないですよね。

ただこの東海原発の場合は、先ほども出たように逃げ道があるから逃げられるけれども、

ただ、危険性は、笹島委員がさっきも言ったように危険性が高いということはあるでしょうけれども、そういうことで、一つさっき出た津波警報で閉じ込められたというか、やっぱり私も、短い時間でも結構苦痛を感じましたよね、いつ帰れるのかという。やっぱりいい体験にはなったのかなと思います、逆にね。

いろいろなところを視察しながらということだと思いますけれどもね。

以上です。

委員長 そうですね。そこで、現場で資料にありましたけれども、女川町、当時人口1万人のうち800人が津波で亡くなられたということですので、やはり地元の方の意識というのは高いですよね。だから津波となったら、もう半島に誰もいませんと、私は聞かされたときには、えっと思いましたもんね。

というような内容を……

副委員長 私は全然苦痛じゃなかったんですよ。何ていうか淡々としていましたよね。一つは高台にあったでしょう。原発自身も高台だけれども、さらに高台だから、原発はやられても、あそこは一応大丈夫。ただ、原発はやられたといつても、やはり放射能をまき散らしたら、また別ですよね。

それから東海村だったら逃げられるというのは、皆さん忘れてはいるんじゃないですか、2011年を。私、原研に勤めていて、あの日は地震の後、自分の施設の点検を終わって帰るんですけど、那珂市まで。もう最初から車は諦めて、置いて帰りました、歩いて。正解でした。もう動けない状態。だから半島じゃなくたって、地震と重なったら、本当に交通路は遮断されるということを考えなければいけない。

そういう意味では、日本の場合には地震が、特に大きな地震の可能性がどこでもあることなので、避難のことを地震と一緒に原発事故の避難を考えない避難計画なんていうのは、大体リスクのうちの7割ぐらいは見落としていると思っています。もちろん地震なんかなくたって原発事故はあり得るから、逃げられるそのときの逃げ方というのはもっと楽でしようけれども、ただちょっとみんなが、そんなに緊張したとか疲れたというのを聞いて驚きました。

ただ、やっぱり経験の差かもしれないね。若い頃からいろいろ目に遭っているから、わりかし淡々と事態をどうするかだけ考えて、不安感とかあまり表に出さないほうなので、何ともなかったです。

渡邊委員 となりますと、大きな違いというのは、やっぱり避難計画がある程度きちんとできているのか、できていないのかなかなと感じます。石巻市では、やっぱりそれなりの地理的なもの、あと避難する人間の数とかいろいろ把握した上で避難計画をつくられている。ただ、ここってやっぱり避難計画すらもできていないし、検証のしようもないですね、ものができないのであれば。結局、机上の空論になっているだけなのかもしれないですし、ただ実際その避難、実際だと、できるのかできないのかという問題はあるかと思う

んですけども、ただそれを検証するにしても、何もない状態では検証ってできないのかなと。となれば、今考えられるもので一回その計画を仮につくるという言い方は変なのかもしれないんですけども、つくり、検証というものをどんどんしながらブラッシュアップしていくというのはやはり大事なのかなと感じます。

いい言い方なのかどうか分からないですけれども、ただ何もないところで避難の訓練をやっても成果につながらないでしょうし、実際それが本番に生かされるかどうか分からぬ。本番があってはいけないんですけども。ただ、そうなるのであれば、やはり計画をつくる、それにのっとった訓練をする、それが駄目なところをまた洗い直すという作業が必要なんじゃないかなと感じます。

以上です。

副委員長 それについては、要するに最初の段階でどれくらいのものができるかに依存するんです。あまりにも駄目だったら、ブラッシュアップのしようもないでしょう。そもそもネックになっているのは何かということなんですよ。ほかの自治体なんかで言われているのは、要するに複合災害は考えないというのをまずやって、それからブラッシュアップするんだとかと言っているんだけれども、何が一番ネックかといったら、人の数の多さと交通路の遮断のリスクですよね。それを何か今の段階でできなかったら、ブラッシュアップのしようがないじゃないですか。

例えば避難するときの人員把握とか、それからどこにどう逃げるかのシステムとか、そういうのはブラッシュアップの可能性ゼロじゃないけれども、一番大きな、とにかく逃げるという部分が全然ブラッシュアップのしようがないんじゃない。何年たったって、だって那珂市はそこそこ真面目だから、行先の人数把握ができていないとか、何だかんだ理由があって、できたってことをしていかないよね。でもほかの自治体、周りは、那珂市よりもかなりいい加減な段階なのに、できたと言っているんですよ。そういう状況の中で、これからブラッシュアップするといったって、何を信じられるんですかという話なんですね。多分、国が大々的なお金を投入して、道路をばんばん造って、しかも地震に強いようなインフラをつくって、やりますかといったら、そんな計画全くないですよね。

だから、何か一番いいのは道路を延ばさないことだと思っていますよ。だって、たかが110万キロワットですよ。火発がありますよね。あれ1基100万キロワットですから、3基で300万キロワットですよ。太陽光発電なんて、今、そもそも原発の倍なのかな。そういう中で特にあそこ、動かさなければならない理由なんてまるっきりないんですよね。だから何のために動かすのかといったら、日本原電の経営的な存続、それからある方々のメンツとか、これ結構ばかにならないんですよ。だって、今まで原子力ってすばらしいことやっていて、そういう意味で、ある意味でちやほやされていた科学者とか技術者とか企業とかが全然、あんたら何やっているのっていう話になっているわけで、そうじゃなくて、華々しい舞台にいたいという人がいまだにいるわけ。それで国は国で、本当の原子力のリ

スクを分かっていないから推進しようなんて思っているでしょう。だから、そういう実利のないことのために、実利というのは、我々那珂市民という意味じゃないですよ。国全体のためを考えたら、何かばかばかしいことやっているという感じですよね。

委員長 確かにマクロな視点でいけばそうなんですけれども、ミクロな視点でいけば、この那珂市の市民の方でも原発関係で働いている方もいらっしゃいますし、そのご家族もいらっしゃるので、もう真っ向から、それが駄目だよという話から入っちゃうと、ミクロの人を切り捨てる形になってしまふので、慎重な意見が必要だと思います。

笹島委員 副委員長の話の続きなんんですけど、1企業の存続なんですよ、だから。それに群がっている東北電力と東京電力なんですね。それで、その人たちが融資し続けながら存続させていっててということ。なんだって常識から考えて避難計画、つくれるわけがないじゃないですか。さっき言った90万人のところで、人口密集地でという。我々が見てきたところと女川原発、全く違うじゃないですか。去年も見てきたところと全然違うところを見にいっているわけです、私は。本当に同じところに、じゃこれから来年の視察は行こうかといったって、どこにもないですよ、だから。こんなところ以外は。ですから、ここ異常なんですよ。それをみんなして、何か危機感がないですよね。本当の、その常識からいって。何の生活の影響ないから。本当に何か起ったときにどうなるんだということを誰も考えないんです、正直言ってそれは。

副委員長 いや考へている。

笹島委員 いや日常生活では考へていないですよ、普通の人は。だから、我々はこの原子力安全対策常任委員会で常日頃考へていますから、我々が声を大きくしていって市民の方に知らせなければいけないという、そういう形で我々はやっていきたいなと思うんですよね。これからも。話は、ずれちゃいましたけれども。

委員長 そうですね、そこも難しいところで、人口が多いからというところでいくと、じゃ車が多いと事故率が上がるから車に乗るなと言っている話と同じになっちゃうので、なかなかそこは難しい話だと。

それで、企業の存続のためとおっしゃいますけれども、企業でそこで働いて生活している人もいるので、マクロな目だけでは確かにそうなんですよ。ミクロな目で見ていくと、一概に否定もできない部分があるということだと思います。

笹島委員 その働いている人まで我々考へられないじゃないですか。いろいろなところで皆さん働いているじゃないですか。何人か知りませんよ。1,000人か2,000人か知りませんけれども、いろいろなところで働いているじゃないですか。それを我々がその人のために考えなきゃいけないんですか。500人、200人とかという。

委員長 いや、そういうことじゃなくて。

笹島委員 それはもう世の中の常であって、普通の経済状態にあれするときは、もう仕方がない。だからそれはかなり……

委員長 この委員会は原子力安全対策の常任委員会ですよね。いわゆる原発が動く動かないよりも、安全対策について私たちは考えていかなければいけないというところの委員会だと思います。

笹島委員 いや安全じゃないから今言つていったら、そういうふうに感想をしてきたわけ。あのへんぴなところにあれしているから、少しは安全だと思ったわけ。7キロか5キロか離れているわけでしょう。ここはもう今言つていた100メートル、200メートルしか離れていない、住宅地と原発が。その違いというのは、ものすごくリスクが多過ぎるんです。あまりにも常識外のあれ、世界的にもう笑いものになりますよ、こういう家のところに原発があるということは。日本ってそういうリスク回避ができない国なんですかと。そこまで話は飛びかもしませんけれども、少し頭の中に入れておいてください。本当にそういう日本はリスク回避ができない国なんだと。もっと真剣に考えろと、市民のため、国民のため。本当にこれ大切なことなんですよ。人が働いて云々じゃなく、みんな市民がすぐ被曝したりとか、財産をもう失って戻れないんですよ、悪いけど。私、菅谷に住んでいるんですけども、もう菅谷に戻れない、能登半島に行くほかないんです。

副委員長 笹島委員の言つてることに半分は賛成なんだけれども、考えなくていいということじゃないんですよ。ただ、最初の部分で言つてるように、いろいろな産業は栄枯盛衰があります。例えば半導体産業なんかは、本当に勢いのいいときと悪いときとがあって、会社によっても違うでしょう。それから、今、自動車産業だって、例えば日産はがたがただと、そんな話があるので、それはしようがないんですよ。

ただ、そこで、このままなくなるような人たちのことを考えてやらなければならぬけれども、そのために社会が、とんでもないリスクを背負つていいのかというと話は全く別なんです。だから栄枯盛衰はある。だから、それはある程度受け入れざるを得ない。それについて対応しなければならないけれども、リスクがあって、社会に自由に害を及ぼすかもしれないものを、その人たちが生活しているからといって、それで動かしてもいいという話は僕はできない。大体、福島原発事故で一体国は幾ら損害があったんですか。東電の訴訟だけで12兆円の裁判が出たんですよ。それ以外の損害があったら、とんでもない金額ですよ。それを電気で起こすのに、ほかの手段がないわけじゃないのに100万キロワットを起こすためにそういうリスク、あれは大体僕、単純計算したら500年に1回くらいありますよ、1原子炉当たりで計算すると。だから、それくらいのリスクを冒していいのかいたら、僕は冒していいと思わないんです。ところが、そんなものは500年に1回とか1,000年に1回なんてないと思っている人が多いんですよ。だけどそうじゃないんですよ、社会にとっては。個人にとっては、リスクは大したことないんです、実は。だって当たらない可能性、僕は交通事故が怖いと昔から思つていた。でも社会にとってはそうじゃないんですよ。この違いをよく認識しなければいけない。でもある人と話したときに、仮に1,000年に1回も大丈夫だとして、100基あつたら10年に1回になりますよと言つたら、聞

いた人は信じられないと、僕の言っていることは。単純計算ですよ、これは確率論の。だけれども、僕の知り合いの技術者に言わせれば、笑っているんですよ。何でそんなことが分からぬのと/orって。

だから、一般の人がむしろ分からぬと言っている人のほうが一般の感覚に近いんです。真剣に考えれば、そうだなと思うかもしれないけれども、漠然とした感覚では、1,000年に1回で100基あつただけで10年に1回になるんですかと。えーっと思うんですよね。今は100基ないんですけどね、最盛期で52基ですか。だけれども、アバウトな計算でそういうことですよ。

だから、そこが難しいと僕は思っています。事故も、さっきの大きな地震による事故というものが一番リスクが高いと言ったけれども、そうじゃない事故もあるから、交通網が遮断された場合の避難対策をつくるのは意味がないわけじゃないんですよ。意味がないわけじゃないけれども、大きなリスクを無視した避難計画って何なんですかということなんです。それがあるから、運転していいという話じゃないんだ。

茨城県にしろ多くの方々は、あんな大きな事故は起きないと思っているんですよ。それは拡散シミュレーションとこの前議論していないんだけれども、そんなに大勢の被曝リスクがあるような計算出しているんです。何でそういう計算になるかというと、そもそも東海第二で大きな放射能リスクがないという想定なんです。福島事故の100分の1も想定していないんですよ。それ考えられます。ちょっとアンビリーバブルな話ですよね。それは何かフィルタ付ペントがあるからという話なんですけれども、だけれども、そんなもの本当に働くという保証どこにあるんですかということなんです。ちょっと長くなりました。

以上です。

渡邊委員 私が避難計画が必要だと言っているのは、原発の再稼働する、しないじゃないんです。避難計画ができちゃうと再稼働するという考えが私ないんです。あくまでも避難は避難なんですよ。今あそこに施設がある。動いている、動いていないにかかわらずある。ただ、副委員長が言われたときには、動いていなければリスクはずっと低いんだよというのがありました。確かにそのとおりです。動いている原子炉と動いていない原子炉では、当然、事故が起きたときの放射能の拡散する量は全然違うと思いますので。ただ、あそこに発電所があるのは事実なんですよ。であれば、避難計画はつくると国の法律もありますし、だからつくらなければならぬんじゃないですか。それをつくった上で検証はしていく。だから、再稼働と再稼働するしないは、また別個な話だと思っているんですよ、私は。あくまでも計画は計画で、住民の安全を守るために、それは必要なんだよね。それが駄目だったら、確かに道路が整備されていないんだったら整備すればいいじゃないですか。それをつくるのは、何が問題だと見つけていくのは避難計画であり、それをブラッシュアップするというのがその作業かなと私は思っていますので、だから、あくまでも避難計画ができちゃえば必ず再稼働するんだという前提には立っていないのが僕の考えなんですよ。そ

れはそれで、また別に考えるべきだと思いますし、ということが、これを言っていくとずっと多分終わらなくなっちゃいますね。というような考えですということで。

委員長 いろいろな意見が出たんですけども、視察から外れましたけれども、それはそれでちょっと今いいかなと思って話していたんですが、今、2年目の第3回定例会の中の委員会になっています。そうすると、次の第4回定例会には、この2年間の調査についての要望書もしくは報告書ですね。要望書は執行部、市長のほうに提出する。報告書ですと議長のほうに提出するという形でまとめていかなければいけないというふうに思うんですけども、今、避難計画の話も出ましたが、避難計画を早急に完成させてくれというと、これは要望書になると思うんですけども、私たちの見てきた原発を、意見をまとめて報告という形で報告書という形にするか、どうしたらいいでしょうかというのも、今のいろいろな意見交換の中でちょっと思いながら聞いていたんですけども、ご意見ございますか。

副委員長 両方出しちゃいけないの。調査結果そのものは出すと。あと要望書も出す。ただ、避難計画を早急につくるというのは言いたくない。なぜかというと、まとめていうとさっきの話と全く逆になるんですけども、避難計画ができなければ動かせないという前提なんですよ。実効性がなくても、できたと言っちゃえば走る可能性がある。今、那珂市の状態はそこそこつくっているわけです。避難計画ができたと言わなくとも、今ある形があれば、それをそれこそブラッシュアップすれば、ある限定的な場合には役に立つことがあるので、つくるはつくるんだが、できたと言わないでほしいんですよ。

それでもう一つ、原発部分動いてほしくないんだけれども、動いちゃう場合もあるわけですよね。だから、その場合はやはり避難計画がないよりは、実効性がないと言えども、あるほうがまし、訓練もしたほうがましということで、そういう趣旨の要望書だったら、案はつくれますけれども。

だからちゃんと避難も、今、那珂市の場合、一番ネックになっているのは避難先がまず確保できていないことですよね。それをちゃんとやるとか、避難のときの市の職員たちがどう動くべきかとか、そんなようなやつはちゃんとつくっていけど。でも、できたと言うなよと。大事なときに実効性がないのは分かり切っているんだからと。でも、ある場合には役に立つということです。

委員長 ほかご意見ございますか。

笹島委員 今の避難先の件なんですけれども、今言っていた避難計画ができちゃうと、やはり今言っていた再稼働のほうが早まる、そういう意味ですか、それは。

副委員長 避難計画、避難先ができたという意味では早まるわけじゃないんですけども、避難計画ができることが前提なんですよ。法的な枠組みというんですか、もし周りの避難計画が一応できて、それで研究所対応という名前がついているんですけども、そういう文書が承認されたら、ゴーが出るんです。ただ一方、その他の問題も抱えているから、まだどうなるか分からない。まず、施工不良の問題があったところでは、大まかな文章は出し

ているけれども、承認されていない。それから、その他の問題もあるからどうなるか分からないです。

笹島委員 いずれにしても1年、2年遅れても先ほど言っていたように、あそこの原電も1,700億円以上使っているわけですから、何が何でもやっぱり再稼働すると意気込みでしようから、やはり今言っていた避難計画ごときで再稼働しないという、そういう仕組みなんですか、それは。

副委員長 形の上では、再稼働できないですね。避難計画がなければ。だけれども、強引にできたことにさせられるという可能性があるんですよ。だって、そこそこのものできているから、あとはおまえのところでブラッシュアップしろみたいなことを言われて、それでできたことにさせられるという可能性はある。ただ、日本原電がどこまで必死に動かそうとしているか、これは僕は疑問だと思うよ。

笹島委員 基本、存続に関わっていますから必死ですよね、それはそれでいいです。人のことですからね。ただ、我々も今言っていた避難計画という言葉が、日本原電が再稼働するから、我々もそれを何かつくらなきゃいけないと、そういうふうに強いられているわけでしょう。そうすると、那珂市はありますけれども周りの市町村は、どの程度進んでいるのかというのをみんな見ていきながらやっていかないと、足並みがそろっていないのか、ここではそろわなくて、そのままいつまでも避難計画はまたまだできていませんよというふうにして、していったほうがいいのかというのはちょっと分からぬでけれども、どういうふうにしていったら。

副委員長 私は周りの足並みなんか見る必要ないと思っていますね。だって、できていないものはできていないんだから、できていないよと。実効性がないんだから、こんなのできたって言えないと知らん顔してればいいんですよ。ただ、圧力は来ますよ、きっと。市民の状況からいうと、水戸市は再稼働、全然乗り気じゃないね、今の市長は。もうそれがよく分からぬ。何というかな、くるっと変わるかもしれないし。協定がありますよね。6市村の協定があるから、かくいうところのオーケーが出ないと動かないとかなっているんだけれども、それについては、本当に1市村、例えば那珂市とか水戸市が頑張ってオーケー出さない前に協定が壊れる可能性はゼロじゃないと私は思っています、正直言って。ただそこまでしてやる価値があるのかと。日本原電が別に東海第二動かなくたって、つぶれるかと言ったら、今、半分つぶれているようなもんですから、日本原電が単独で仕事をしているわけじゃないんですよ。いろいろな電力会社が出資しているので、その中で、民間企業でいうと損が出る部分の処分というの、ありますよね、言葉が。そんなふうにして措置すればいいし、廃炉作業とか、そういう仕事はまだ仕事がたくさんあります。だから、ある意味で言うと、困るのは原発が動いている場合に、日本原電とは別に周辺の会社がありますよね。いろいろな仕事。そこには仕事が原発を動かす仕事に関連する会社と廃炉作業に関する会社は同じじゃないですから、ずれがあるので、その上の仕事の場合は、大分変

わるかなと思っています。

委員長 本題にちょっと戻そうと思うんですけれども、要望書にするか報告書にするかということで、今、副委員長から両方出せるなら出したいということでしたが、両方出す方向でよろしいですか。

要望書としては、避難計画が今出ましたが、ほか何かございますかね。執行部に要望することとしては。

まず、いいですよ、漠然としたことで、こういうことというところから入っていただいて、そこから。

副委員長 私は避難計画だけじゃなくて、日本原電の安全管理能力をちゃんと見てほしいという言い方をしたい。やっぱりいろいろ能力不足なんですよ、僕から見ると。あんなに金かけてやっているのに。

委員長 安全管理能力を執行部にみてくれということなのかな。

副委員長 そうそう。だから、再稼働可否の判断に避難計画の問題とか、将来の話になるけれども、そういう面での基本的な能力を考えた上で、そういうことも判断の材料にしてくれと。

委員長 というか、まだ時期尚早のような気もしますけれどもね、そこは。

副委員長 いや、それはあまり時期尚早というのではなくて、最初に、今すぐイエス、ノーというんではなくても、様子を見ていて、この人たちはしっかりしているかなとか、そういうふうに見てくださいということですよ。

委員長 それを見定めているのがこの委員会だと私は思っているんですけども、そこも含めて要望書というか、報告書のほうにそれを入れるのはいいのかなと思うんですが。

取りあえず素案をつくって……

副委員長 素案をつくってから議論しましょう。

委員長 これ要望書のほうは委員長、副委員長のほうで1回素案をつくらせていただく形でよろしいですか。

(「はい」と呼ぶ声あり)

委員長 報告書のほうは、誰かちょっと私まとめたいという方がいれば。もちろん素案でいいんですよ。どうでしょうか。

(「お任せします」と呼ぶ声あり)

委員長 じゃこちらで。

では案を作成しまして、委員の皆様には後ほどラインワークス等でまずお送りするという形で対応したいと思います。

続きまして、(2)その他を議題といたします。

前回の委員会で、勉強会という話があったかと思うんですけども、覚えていらっしゃいますか。

笹島委員 覚えていません。

委員長 原子力発電所、原発に賛成の方と反対の方をお呼びして意見をお互いに聞くというようなことをやりたいなという話になっていまして、前回お名前が出た那珂市の原子力専門委員の山下様にお話をしまして、出てもいいよというような話みたいなので、今、調整を進めさせていただいているというところです。

その勉強会をどのような形で開催していくかということを決めたいと思うんですが、①番、議員全員での勉強会とするか、②番、任意で議員が参加する勉強会とするか、③番、委員会のみの実施とするか。どれがよろしいでしょうか。

副委員長 任意の議員が参加する勉強会。基本的には我が委員は、よっぽどのことがない限り参加と。理由は、過去に原子力安全対策常任委員会でいろいろ勉強会をやったんですけども、運営委員会が何か講師についてぐちゃぐちゃいちゃもんつけてきたことがあって…

…

（「議運がですか」と呼ぶ声あり）

副委員長 議運がです。だからそんなの面倒くさいから、基本的には僕は、全体でやるやつでも議員の任意参加だと思っているんです。ですから、議運に諮る手間をやる必要はないと思います。議員の皆さんに当然ことはこういうふうにやりますので、参加したい方はどうぞと、それで議論にも参加できる。

委員長 任意という話がありました。任意でも委員は必ず出席ですからね。

副委員長 極力。

委員長 ほかご意見ありますか。こう思うよというのを言っていただければ。1番でも2番でも3番でも。

前回も2番です。2番でよろしいですかね。

2番の委員を中心にほかの議員には呼びかけをして、任意で出席してもいいですよという形での開催を進めていきたいというふうに思います。

では、そちら議会事務局と日程のほうを調整して、改めてご連絡をさせていただきます。ほか委員の方から何かありますか。

副委員長 勉強会なんですけれども、原子力容認なり推進の方で山下さんの話を聞くんだけれども、反対意見も聞きたいので、私の知り合いにちょっと呼びかけて、講師をやってくれるかどうか聞いてみたいと思います。今度はなるべく近在の方で考えたいと思いますので、よろしいでしょうか。

委員長 よろしくお願ひします。

副委員長 じゃ提案は後でさせていただきます。

委員長 ほかよろしいですか。

（なし）

委員長 本日の議題はこれで全部終了いたしました。

以上で、原子力安全対策専門委員会を閉会いたします。

皆様お疲れさまでした。

閉会（午前10時48分）

令和　　年　　月　　日

那珂市議会 原子力安全対策専門委員会委員長